

編集後記

日本学刊第 17 号は無事出版となりました。この場を借りて貴重な原稿を送って下さった投稿者の皆様、研究の合間を縫って審査して下さい下さった外部査読者の先生方、原稿の誤字脱字を丁寧に指摘して下さい下さった編集委員の皆様へ深く感謝申し上げます。

本年度の日本学刊では教育に関する論文と言語に関する論文をそれぞれ掲載いたしました。「高等教育における日本語学習をどう捉えるか?深い学習アプローチ VS 浅い学習アプローチ」では、学習者が多様なアプローチを使い日本語を学習する様子が深く考察されています。現在の香港では香港中學文憑 (Hong Kong Diploma of Secondary Education) の試験結果が学生の進路に大きく影響します。そのため試験対策が上手な学習者が大学に入学しやすい環境となっています。しかし当論文は試験対策が推奨される環境においても、学習者は学問自体への興味など様々な動機から学習を進めており、彼らの学習アプローチが多様であることを示しています。学習者の成績を付け評価するための授業をするのではなく、学習者の意欲を高め学問への熱意を刺激する授業をするためにも大いに参考となる論文だと考えます。

「トートロジー文とコピュラ文との関わりについて—その意味構造に注目して—」は、トートロジー文が構造上コピュラ文であるという先行研究の前提に基づいて展開された言語学的考察です。文脈に基づく意味構造に焦点をあてトートロジー文とコピュラ文の対応関係が探られており詳細な分析が提示されています。

また研究ノートや報告において、「日本における大正時代 (1912-1926) の消費文化 一日常生活の現代化について—」「中上級学習者を対象とした CBI の実践報告—「歴史」の授業における学習者の質問の変化—」「台湾の非日本語学科の大学生が望む日本語の授業—日本の調査との比較—」という日本や台湾を対象とした 3 本の学術的意義ある研究や実践報告が掲載できました。

一方、日本学刊の出版地である香港を舞台とした多くの実践報告や研究も掲載することができました。「楽々旅行のための会話教材—教師自身の振り返りを通して—考察—」「生教材を活用したタスクベースの会話教材の開発」「なぜ中国からの日本語学習者が香港に留学するのか—中国大陆からの日本語学習者へのインタビューを通して—」の 3 本は香港の日本語教育における現状と可能性を様々な視点から掘り起こしています。この内の 2 本は今現在香港で学んでいる大学院生によって書かれた文章であり、学習者が当事者として香港の日本語教育を改善していこうとする姿勢が現れた素晴らしい例といえます。「香港の日本語学習者減少の要因—調査報告—」

「2013 年度香港・マカオ日本語能力試験実施報告」の 2 本は学習者や教師だけでなく日系企業関係者、政府職員など日本語教育に関わる全ての人に情報を提供しています。

本誌を手にとり下さった皆様にとって、日本学刊 17 号が有意義であるよう編集者一同願っております。最後になりますが香港日本語教育研究会シャノン・ウォン氏がレイアウトや査読の連絡を助けて下さったおかげで無事出版に至ったことを感謝と共にここに記します。

編集委員長 青山 玲二郎

2014 年 3 月吉日